生研公開講座

「建築緑化の新しい試みータンポポとニラとマツの家ー」

藤森　照信　（東京大学生産技術研究所人間・社会大部門　教授）

藤森でございます．本業としては建築の歴史とか都市の歴史の研究をしているのですが，ここ10年ぐらいいろんな設計もしております．設計と関係することで，また古い日本や世界の建物のことに興味を持って調べているわけです．僕がここ10年ほど興味をもってずっと調べたり，あるいは設計をしていることは，基本的には自然と建築の関係をどうするのがいいかということです．自然を取り入れて建築を作るとか，あるいは建築をどうやったら自然と調和するようにできるかという大変大きな課題です．近年ますますこのテーマは具体的な問題となっております．

例えば，屋上庭園というやり方がある．これは建築に自然を取り込む方法としてごく一般的なやり方です．今，屋上庭園というのは大変法的な力もございまして，例えば横浜市なんかですと，みなとのみえるが丘公園というのがあるのですが，そこから見える街の中の建物で屋上庭園をやれば，そこの床面積を増やすのを許すというようなことも計画しております．昔はちょっと考えられなかったことがだんだん起きてきている．

自然と建築の関係をどうするか．これは基本的にはエコロジーの世界的な動きの中で，極めて先端的な問題として出てきているわけです．私自身の歴史的なものを見てきた経験に照らすと，あるいは本質的な建築と人工物とのあり方というものを考えますと，屋上庭園というやり方には疑問を禁じえません．屋上庭園は世界的にもずっとありますし，特に日本の場合，だんだん強い方向になってきているのですが，うまくいかないのではないか．あるいは間違ったことになるのではないか，そんな危惧もございます．

まず，自然と建築のあり方のうちの，僕から見て問題があるのではないかと思ういくつかの実例をお見せしたいと思います．最初は，屋上庭園の例ですけれども，屋上庭園というのは，世界的に言いますと，ル・コルビジェというフランスの建築家が，1920年代にそのことを主張しまして，それがだいたい世界に広がっていきます．戦前の段階の日本人もやっておりますし，戦後もやっております．

屋上庭園についてのコルビジェの主張は，わりと組織的な，体系的な主張でございまして，屋上庭園だけをどうこういったわけではありません．基本的には地上を，例えば移動とかの都市活動のために地上を開放して，ピロティを提案します．この建物もそうですが，入口に柱だけで人がすり抜ける吹き抜けみたいなのがありますが，あれをピロティというのですが，地上をピロティにして，それによって地上から失なわれる緑とか庭園的な要素を屋上に移してしまう．都市を全体的に改造する方法として主張したのがコルビジェの屋上庭園です．その主張が現代の屋上庭園の中心になってくるのですが，そういうことと全然関係なく，特に日本人の中には，屋根の上とか，ひさしの上に植物を置くというのはずっとあったことなんです．

江戸時代から盆栽を置いている家がいっぱいありまして，コルビジェの主張が1920年代に行われるのと関係なく屋上庭園をつくっていた人たちがいたんです．ですから，現存する世界で一番古い屋上庭園は日本にあって，大正3年に下関につくられたものがございます．これを見るといろいろな問題が，なぜ僕が屋上庭園はやめたほうがいいんじゃないかということがわかりますので，それをお見せしたいと思います．

（スライド1）

これが世界最古の，大正3年につくられた秋田商会の屋上庭園です．バビロニアの空中庭園とかいうのは全部屋上庭園のことですが，残っていません．80年以上も前に下関に建てられました．建主は貿易商だったのですが，その方が，全て鉄筋コンクリート構造で作った．表面にはコンクリート以外使っていますけれども，骨組みはコンクリートです．コンクリートで建物をつくれば，土を屋根に乗せて大丈夫だということで屋上庭園をつくられたわけです．

庭園の中にシャチホコの乗った，僕は最初神社だと思ったんです．そしたら，これは茶室です．今市役所がこれを引き取って保存しております．角の塔のてっぺんはランタンというのですが，ここに自分ちの船が，大陸貿易をやっていまして，帰ってくるときとか，出ていくときは，火を灯して，みんなで手を振ったりしたんだそうです．

ちょうど海に面してつくっていた．土はおそらく40 cmぐらいですか，完全な日本庭園ができております．

庭園の一画の石碑に捷霞園と書いてあります．霞の中にすむ園，つまり霞がただようような高いところに庭をつくろうということだと思います．

この屋上庭園はとても面白いのですが，建築と自然ということだと，実は大変大きな問題がございまして，建築と自然は全然別ものになってしまっている．

建築をやっておりまして，やはり全体として一つのものであってほしいと思っているわけです．そこが難しいところで，別でもいいじゃないかという考えもあるのです．美というものについてどう考えるかということですが，基本的に統一ある美しさであってほしいと考えています．

エコロジーの人たちの主張と僕の感じが違うことがある．建築と緑が一緒になったときに，ある美しさなり深い味わいなり，そういうものがうまく出ているかどうかというのはすごく大事なことです．しかし，エコロジーの人たちというのは見掛けの問題というのはほとんど気にしないんです．もっと本質的な，エネルギーの問題とか，ごみの問題とか，熱の問題を持っているわけです．しかし，人間がつくっていくものですから，美しさというのは大事です．ちょうど人間の表情がそうですが，表情を見ると何となく，40過ぎたら自分の顔に責任を持てといいますけれども，なんかわかるんですよね．その人の来歴とか，状況とか．それと同じで，建築と緑の二つが合さった表情がよくないものは何か本質的な問題がある，トラブルがあるというふうに考えています．

（スライド2）

これが，コルビジェが屋上庭園を主張して，わりと初期につくられたサヴァ邸です．一階はピロティといいまして，車が通るようになっている．要するに彼の主張どおりにやったわけです．ぐるぐると車が通って，そういう交通とか使用人たちがいて，物の運搬とか，そういうことに開放して，2階に屋上庭園をつくって，そこに主人たちが暮らす．こういう主張を一つの建物でやったわけです．

これを見ると，どこが屋上庭園かと思う．設計図を見ますと，二階に結構緑が生えている．

ところが，コルビジェはずるいやつで，出来た建物のどこに屋上庭園があるのかという感じです．わずか少しだけあるのです．コルビジェは，生涯，屋上庭園を言うんです．しかしアリバイに近いんです．本気だったのかという問題がある．コルビジェが日本でつくった唯一の作品が上野の国立西洋美術館ですが，あれを担当した日本の建築家に聞いたのですが，あのときコルビジェ先生は，先生のほうから屋上庭園のことは言わなかった．だけど，お弟子さんのほうで，先生，屋上庭園どうしましょうと言ったら，それはつくったほうがいい（笑）．どういうふうにつくるのかといったら，大きいコンクリートで浴槽みたいなのをつくりなさい．そこに木や草花を植えなさい，と．あまり本気じゃないというのはそれですぐわかるわけです．並べて，しばらくして枯れて，先生に，どうしましょうと言ったら，そのままでいい（笑）．コルビジェは，1920年代に言ってみたものの，やってみると，意外とうまくいかないことがわかったわけです．おそらくその一番の問題は植物の問題で，コルビジェの本を見ると，もっと植物が書いてあるんです．現実的に見ると，ほとんど植えましたというぐらいで，できるだけ隠してあるわけです，見えないように．恐らくコルビジェはやってみてわかったんですよ．植物が建築と合わないと．ちゃんと植物を植えると，建物全体が植木鉢状態になってしまうわけです．植物というのは当然人間と関係ない独自の美学を持っていますし，独自の繁茂をするわけですが，それが建築と全然別な視覚的領域をつくってしまう．そのことに恐らくコルビジェは気付いたんだと思うんです．それでやめたわけです．

Photo 1　秋田商会

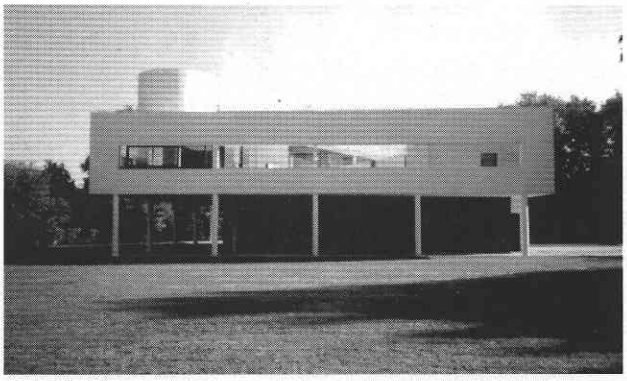

Photo 2　フランスのサヴオア邸

実際にコルビジェの屋上庭園というのは，後になるほど木，植物が少なくなります．一番大規模なのはユニテ・ダヒタシオンというのがあるのですが，それの屋上庭園は，探さないとわからないようなところに植えてあります．外から絶対見えないし中からもわからない．どうもコルビジェは，口では何も言ってないのですが，どこかで気付いたと思うんです．植物というのはコントロールできない．それは人間が生み出した建築の美とどうもうまくいかないと．

コルビジェが屋上庭園を試みてうまくいかなかった以降，一流の建築家で屋上庭園をやった人がいないんです．それじゃ，屋上庭園をやっているやつはどういうやつかということになるのですが，そのことは別にして，とにかく世界でも日本でも，コルビジェ以降，一流の建築家で屋上庭園をやった人がいないんです．

屋上庭園にはいくつか問題がありまして，ビルが高くなりますと，屋上に植物を植えても見えないということがあるんです．それから，超高層ビルになりますと，屋上は小さくてしょうがない．階段状にして植えればいいじゃないかということでやった例もある．とにかく日本は屋上庭園に関してものすごく寛容なんです．屋上庭園というと，行政とか民間が結構お金を出してくれる．屋上庭園というのは，1階分のお金があれば完璧なものができるんです．つまり6階建てであれば，5階建てにすれば完全な屋上庭園ができる．大木も入りますし，池をつくってもいい．

大階段状屋上庭園が福岡に実現しました．

これは僕は興味があって，屋上庭園が，本当に建築と視覚的に優れた環境をつくることができるかということを見にいったんです，できてしばらくして，見て，なんか基本的に間違っているんじゃないかと思った．

階段がついてます．僕は見てたんです．誰も上っていかないですね．お昼休みだったんですが，みんな下の公園で遊んでいる．ただ，一人女の方が上り始めたので，僕もあとをずっと行ったんです．途中まで行って，ばかばかしくなって．下りてきたんですがね．少なくともこれのために膨大なお金と維持費がかかっているわりにはうまくいってない．

建築の緑化というのは，エコロジーとともに再び現われてきた．コルビジェが言ったのとまた別に，近年ですが，エコロジーの流れから出てきた．物好きの系譜があるわけです．僕は結構物好きのほうが好きなんです．物好きがただやってきた．思想も何もなく（笑）．次に，コルビジェが都市の問題としてやった．その次に現れたエコロジーの人たちは，都市環境なんかの問題でやった．世界で最大のエコロジータウンがカッセルにございます．エコロジービレッジといいまして，ご存じのようにドイツはものすごい国で，言ったことをそのままやっちゃうところです．エコロジータウンというのをつくっているのですが，それを見に行った．天気が悪かったというのが僕の印象を悪くした理由ですが，天気の悪い日に屋根に草が生えているのを見て，もううっとうしくて，うっとうしくて．

日本人は雨の中で緑があるのを，梅雨の連想で，すごくうっとうしいと感じますが，ドイツの人たちはそう思ってない．エコロジータウンの入口の辺にあるのは，ちょっとおさえたやつで木造住宅の二階の屋根に草を植えている．木造の上に草を植えるというのは，ドイツではものすごく簡単なんです．木の合板張って，上に防水紙張って，土を乗せる．それでお終いなんです．日本だと，そんなことしたらとんでもないことがいっぱい起きるのです．まず植物の力が強いということがあります．もう一つ大きいのは，結露という問題がございまして，こういうことをやりますと必ず天井側に結露ができて，とんでもないことになるのですが，ドイツの場合結露がないんです．日本の場合，これやりますと，植物層の下に空気層をつくるんです．ドイツではそれがないので，すごく簡単につくれるのです．だんだん奥へ行くと，ディープなやつが出てくるわけです．

（スライド3）

しかし，これはいかがなものかという（笑）．やっぱりこれはおかしい．大階段状と同じです．なんか基本的に間違っている．人間はここまで自分たちがつくり上げた文明に対して反省しなければいけないのか．建築は人間がつくった最大のものです．それをここまですることはないだろう．この中でも別に湿気は，日本のようにめちゃめちゃ多くなく，ごく普通に暮らせるそうです．岩村和夫さんがここでずっとやって，住んでおられて，帰ってこられて，聞いたら，別に問題ないと．岩村さんに，これと同じことを日本でできますかと言ったら，日本は湿気の問題があるから，いろいろ特別なことをしないとだめだろうとおっしゃっていました．

（スライド4）

これはいいんじゃないかという例をいくつか，歴史的な

Photo 3　ドイツのカッセルのエコロジー住宅

やつで，極端な形ですが，立木をそのまま建築に利用するという，一種のトムソーヤみたいな例がございます．現在，樹上住居は，アメリカでは物好きな人たちがやっていますし，それから歴史的なといいますか，ニューギニアの原住民なんかの例ですと，高さ50 mぐらいのところの樹上住宅がございます．部族がお互いに人食いをするものだから，それを防ぐためです．今残っているのは，NHKの番組を見たのですが，30 mぐらいのに今でも住んでいます．30 mくらいの木の上につくっている．そういう特殊なものではなくて，もう少し文明化された中で木と建築を巧みに噛み合わせた例を紹介します．

（スライド4）

これはイギリスの例でございまして，イギリスの地方の領主，マナハウスとかホールといいますが，これはホールといわれるやつです．ピッチフォードホールという，地方の大地主さんのお宅の中にあるんです．それを見に行ったんですが，ここに木の上の家があるはずだから見せてほしいと言ったら，奥のほうにあるから勝手に見ろと言われて，見せていただいたんです．

これが，世界で，原始人の家でなくて，樹上住居で唯一歴史がわかっているものでございまして，16世紀につくられています．昔のエリザベス女王が十何歳のときにここへ上ってみた．それでこういうことに関心を持っている人たちに知られているのです．これは，ナラ系の木で，ものすごく古木だと思いますが，その上に乗っけてあります．

何のためにつくられたかわからないのですが，景色を見るためだろうと言われています．そうだろうと思います．

大風で一度枝が折れまして，相当木自身が傷んでいて，いい状態ではないのですが，かろうじて立っています．これを見ていいなと思うわけです．個人的趣味かもしれませんが，これはうまくいっているという気がしています．さっき言いましたように，一目見てわかる，そういうことは（笑）．

イギリスの16世紀ですが，田舎ではチューダーという，中世のスタイルをやっていまして，典型なチューダースタイルを採用したものです．

中には，ランプ吊りがありますから，ランプを吊って，窓があって，大きさは，中にテーブルと椅子が二つ置いてありましたから，2人か3人でお茶を飲みながら見るという，そういうものであった．これ自身には名前はない．樹上の家なんです．世界で一応僕がいろいろ調べたところ，二つしかないんです，こういう歴史的なもので，木を利用した建築というのは．これが一つです．

もう一個が，フランスのアルビルというところにあります，アルビルのナラの木の教会という．アルビルの村のナラの木の教会，チャペルというふうに名前がついています．僕はそれを，アメリカ人の書いた本で読んだのですが，現物があるかどうかは書いていなかった．2ヵ月ほど前にフランスに行ったとき，うちの学生が向こうへ留学していたものですから調べてもらったんです．調べたら，アルビルの木があるかどうかはわからないけれども，アルビル村のインターネットで調べると，「木を保存する会」というのがある．木もまだ保存されているのではないかということで，じゃあぜひ行ってみようと思って行ってみたわけです．

（スライド5）

これがアルビルのナラの木のチャペルです．なぜチャペルかというと，木の洞のなかが一応教会です．

これは恐らく皆さんが日本人としては最初に見るのではないか．世界の人でもこれを見た人は少ないと思います．

12世紀にすでにあったことがわかっています．12世紀というのは鎌倉時代ですから中世です．昔の古い写真を見ますと，木はもっと普通に茂っていた．幹が枯れてたもの

Photo 4　イギリスの樹上の家

Photo 5　フランスの樹上のチャペル

だから，とにかく一生懸命保存しているのです．これがなぜチャペルというかというと，幹の中がチャペルなんです．根元に1つチャペルがあって，階段をぐるぐるまわってみますと，上にもう一個チャペルがある．2層のチャペルになっています．僕は，文献で読んだときに，木の中にチャペルが2層にあるというのが理解できなかった．日本人だと，これはほこらというのですけど，英語にほこらにあたる言葉がないんです．キリスト教の教会施設の中に人が入らない施設ってないんです．当たり前ですけれども．チャペルという言葉しかないんです．木の中へチャペルをつくるというと，木は直径10mとかないとできないだろうと思ったのですが，なんのことはない，キリストのほこらと言えばいい．

チャペルというのは，必ず扉があって，入って，そこにマリア様やキリストがいて，人間が立って拝まないといけない．そういうふうにつくったわけです．一人が斜めになって入って中へ立つと，目の前にどんとマリア様がいる．ちゃんと中を建築にしてあるんですよ，板を張って．毎日花も生けております．

由来がよくわからないんです．12世紀になぜここにこういうことをしたかという．恐らく僕が思うに，キリスト教以前の自然信仰がまだ残っていて，この木を精霊の宿る木みたいな信仰があって，それにマリア信仰が，マリア信仰って土俗的なものをひき出す性格がありますから，マリア信仰が入って，マリア様のチャペルが生れた．今2階にはキリストがいるのですが，1階のマリア様が先にできたのではないかと思うんです．

もしそうだとすると，日本人の場合，例えば立派な木があって，神様がいるとしますと，その周りに柵かなんかしたり，あるいは木にしめ縄を張って外から拝むわけです．キリスト教の習慣としては，自然信仰をそのまま認めるわけにいかない．そこで，キリスト教式に中に入って，すごく不自然なことですけれども，中に入るとマリア様がいる．

Photo 6　青森県八戸の丹番屋

キリスト教は，キリスト教以前の自然信仰，自然信仰をアニミズムとして否定していましたから残ってないのですが，もしそういうのが残ったとすると，世界中にもうちょっとあっていいんですよ．僕の知る限りこれしかない．キリスト教が自然物を崇拝するということはないので，もしかしたら特殊な例で，ここにマリア様が表れたとかいうような話があるのかもしれません．

今のところ歴史のあるものとしては，さっきのピッチフォートホールと，アルビルのナラの木の教会，この二つがあって，両方見て，何となく面白いし，いいなと思ったわけです．ただ直接そのまま現代の建築に使うわけにはいかないのですが．

（スライド6）

もう一つ，僕が好きなのは，これでございます．八戸の船番屋で，文化財になっているのです．漁をする時期だけここへ来て泊まって，漁をして帰るものですが，この上に草が生えていまして，茅葺きの感じと，茅葺きは自然の素材ですから，それと上の草が，何となくいいなというものです．

（スライド7）

これはかなりすばらしい．屋上庭園ではないのですが，屋根のてっぺんにちょっと草が生えているのは，造形的に必然性を感じさせる．これは建築とうまく行っているという感じがするのです．お互いにひきたてあっている．これがないとさびしいわけです．

これは芝棟という日本の伝統的な民家の技術でございまして，江戸時代には東日本に膨大にあった．戦前の段階ですと，まだ数万棟があったと言われています．僕も，長野県で育って若干覚えております．しかし，最近調べてもらったら，今2棟しか残ってない．現在，たくさん残っているのは，岩手県と青森県の太平洋側ですが，管理が悪くて，恐らくあとしばらくしたら，文化財として指定されているもの以外は，消えてしまうのではないか．

芝棟では三つ立派な植物があって，イワヒバ，ユリ，もう一つイチハツというアヤメ，この三つが日本の芝棟界の，

Photo 7　岩手県の芝棟

三名物なんですが．

芝棟というのは歴史もありまして，恐らく縄文時代に，もっと屋根の傾斜が少なくて，土を乗せて草を生やしていたときの名残だと思います．防寒の工夫です．

（スライド8）

上に生えているのはイチハツです．

これはフランスのセーヌ川の下流の，有名な戦争のあったノルマンディ地方です．実は芝棟というのは日本とフランスの2ヵ所にだけしか残っていない．恐らくユーラシア大陸に相当広く，寒いところにあったと思うのですが，現在2ヵ所でしか残っておりません．にくいことにフランスのほうが管理がいいんです．

これを撮ったところはマリーベルニエールというエコロジービレッジというか，村全体がエコロジーの村になっていまして，産業的にはリンゴ酒の名産地らしくて，伝統的なお酒を造っていて，皆さんすごくお金はあるようです．それで，芝棟を丁寧に守ってまして，恐らくこの村だけで数十，フランス全体でまだ数千はあるのではないかと思いますが，ちょっと悔しい思いがしたのです．

最初に行ったのが，2年前です．どうしてもイチハツの咲いているときに行きたいと思ってこの春寄ったのですが，今年は遅いらしく咲いてなくて残念だった．

イチハツはすごく乾燥に強い．

芝棟は歴史的な中では一番うまく建築に自然を取り込んだ例ではないかと思ったわけです．

（スライド9）

いま，芝棟のやり方を他人の家でやっているところです（笑）．九州でつくった，高取さんというお宅です．てっぺんですけれども．こういう仕事はなかなかプロがやってくれないので，自分でやることになる．もちろん足場とかそういうのは全部用意してくれるんですよ．向こうはできるところまでやるのですが，その先は，プロはやった仕事に責任をもたなければいけないので，やってくれないんです．あとは先生やりなさいということで，自分でやるしかないのですが（笑）．

Photo 8　フランスの芝棟

結構いろいろ勉強になりました．屋根に銅板を張ったんです．銅板というのはぼこぼこするので，普通はぼこぼこしないためにいろんな工夫をするのです．そういうのを全部やめて，ぼこぼこのままでいいということで張ってもらったら，すごく味があるんです．だんだん風化して緑青が生えてくるんです．松の緑がしたたっているみたいになるのではないかと思ってやった．結構うまくいってまして，自然の素材を建築に取り込むとき重要なポイントは，構造は，コンクリートでも鉄でもどうでもいいのですが，自然の素材で仕上げることがやはり大事だと思います．ところが自然素材だけで仕上げられないんです．屋根の問題が一番大きい．銅板はほとんど自然素材と同じように，風化する力といいますか，風化しても美しいんです．自然のものは風化しますが，それと同じような，そういう能力を持った工業製品となると，銅板だけです．ですから銅板と自然の素材，それから自然の植物は合うのではないかと思っております．ちょっと志村けんというか，バカ殿様のチョンマゲみたいで，面白いんだけど，やはり不安があって．施主は見て怒るのではないかと心配した．そしたらゲラゲラ，ゲラゲラ笑われて，それでまあ一安心したんです．

引渡しの日に，ちょうど年末だったものですから，クリスマスの時期で，松に電飾をしたら，施主が拍手して，大笑いされて．でまあ問題なかったんです（笑）．一応自然の素材と，自然の素材に合う工業製品とでやった例です．これはうまくいってまして，施主はすごく松を大事にしてくれて，タロウマツという名前がついて，ときどき，「雪の中のタロウマツ」とか写真が来たりします．

これ，大きくなってどうなるのだということがあるのですが，幸い日本には盆栽という技術がございまして，とにかく大きさがこれ以上ならないように手入れをしていただいています．盆栽というのは，上手にやりますと何百年たっても大きくならない．そしてだんだん風格を帯びてくるので，あと20～30年したら結構面白い形になるのではないかと思います．

（スライド10）

もう一個，自宅でございまして，タンポポハウスという

Photo 9　一本松ハウス

のをつくったのですが，別に自宅でやろうとしたのではない．できたら他人の家でやりたいと思ったのですが，なかなかそういう人がいないんですよね．本当は超高層ビルのタンポポ仕上げというのがあって，それが発想の元なんですけれども，なかなか超高層ビルを注文してくれる人がいないので，自分の家でやったのです．鉄平石という石を張って，間に帯状にタンポポを植えようという．頂部は芝棟にしています．

植木屋さんですが，あきれながらやったんです．日本タンポポを植えています．日本タンポポというのは今では少ないんです．スプリンクラーがあって回るんですが，これが失敗したんです．どういう失敗かというと，工事現場は幕がかかっているんですよ．だから散々実験して大丈夫だった．完成して，幕を取って，まわしたら，隣の家の洗濯物に風にのってかかってしまう（笑），やってみないとわからないですね．頂部は芝をやって，さらにステンレスの金網を張って，押さえて，芽が出ると金網が隠れる．

春になって花が咲いた．これがまたやってみないとわからない．タンポポというのは屋根の上にあったって，下から見てよくわからないんですよ（笑）．これはほんとに努力が報われないんです（笑）．

壁面から出ているのですが，友達なんか来て，どこに生えているんだと．あそこにある，おおそうかという感じで．やっぱり難しいんですよ．屋上庭園の問題というのは，植物が建築と別な世界をつくっているということで，何とか皮膚から産毛が生えるように植物を生やしたいというのが僕の夢なんです．帯状にやればうまくいくと思ったのですが，やっぱりうまくいかないですね．難しい．

春が終ると，タンポポが枯れちゃいます．根は残るのですが，梅雨以降ポーチェラカというのを植えていて，先週植えましたが，ちょうどこの時期苗が出る．300株ぐらい植えるのですが．誰もやってくれませんから一人でやるわけですが．一応足場もあるんです．僕の歩幅にあわせてあるんです．足掛けて，命綱しばりながら作業を．だいたい1日でできます．

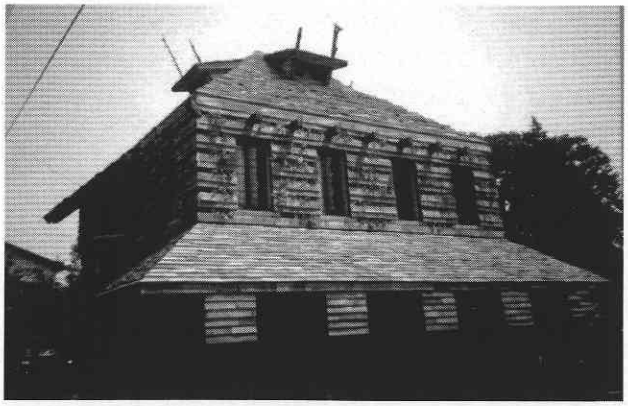

Photo 10　タンポポハウス

（スライド11）

これは，僕のイメージと違う．明らかにその辺のおばさんのイメージなんですよね（笑）．おばさんとか，幼稚園とか，そういう感じなんです．僕の好みは，もう少しりりしいというか．これではただのガーデニングではないかという気がしていて，どうもうまくいかないんですよ（笑）．これはまだいいんです．もっと花が大きくなると，異様なもんですよ（笑）．近所の幼稚園児が散歩に見にきたりして．

なかなかうまくいかんということで，なんとかしようと，ニラハウスというのをやったんです．ニラであれば，屋根の上で強いということと産毛に近いような感じがする．ニラは白い花が咲くときれいなんです．だからニラをうまく毛穴状にポットにして植えれば，建築といいバランスになるのではないかと，作家の赤瀬川原平さんと親しいものだから．よくあんなの許してくれたと思うけど，やったんです．こういう仕事はプロがやってくれないので，全部赤瀬川さんのお友達や関係者の奥さんに手伝ってもらってやったんです．

（スライド13）

板を張って，穴を開けるまでは全部プロがやってくれる．あとホースを回したり，植物育てて，鉢で植えるのはみんな素人がやらなければいけない．

ここに，ブリッチがあるんです．こっちが道路で，半分

Photo 11　タンポポハウス

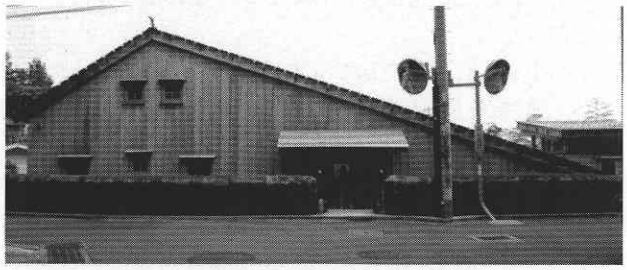

Photo 12　ニラハウス

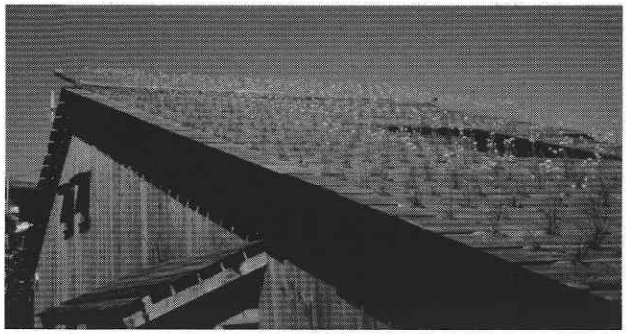

Photo 13　ニラハウス

Photo 14　ニラハウス

下がったところに玄関．このブリッチを，僕は上げたかったんです．ヨーロッパのお城みたいに上げる．赤瀬川さんはもの書きですから，編集者が来て原稿できてないときはさりげなく上がっているとか（笑）．朝，家から出るときも，跳ね橋から出て行く．殿様というか，ヨーロッパの王様になったみたいでいいと思ったんです．赤瀬川さんに，ぜひ跳ね橋にしたいと言った．二つ提案したんです．基本的には誰の家に対してもこういうことをやってるわけではなくて，そういうことを理解してくれる人でないと提案しないのです．赤瀬川さんに頼まれて，友達だし，あまり変なことしたくないと思っていて，ごく普通のやつにしますからと言ったら，せっかく君に頼むのだから何かちょっとやってほしいというので．そのときは嬉しかったですけれども．二つやろうと思ったんです．屋上にニラを植えるのと跳ね橋と．そしたら赤瀬川さんは，二つは困るというんです（笑）．じゃあどっちにしますかと聞いたら，跳ね橋はやっぱり困ると．僕びっくりしたんです．どう考えたってニラのほうが変なのに（笑），跳ね橋をやるとみんなが見にくるから困ると．跳ね橋なんて，下ろしておけば何もないんだから．それで跳ね橋は困るというのでやめになって，ニラになったんですが，こっちのほうが当然見にくるわけで（笑）．

（スライド12）

ガードレールがあって，市役所に聞いたら，これは赤瀬川さんの家のものであるから自由にしていいということで．タンポポハウスのてっぺんをやった技術でガードレールを土で包むことをやったわけです．これはプロにやっていただいた．

中へ土を入れて．これでうまくいくだろうと思ったんですが，植物が，つまり垂直に立った場所で芝がどう生えるかよくわからないんです．困ったときは，そのものになったつもりで考えろと言われたことがある．吉村順三先生の設計した暖炉はよく燃えるんですよ．ほかの人がやると，暖炉って燃えないことが多い．吉村先生曰く，煙の気持ちになってつくれと（笑）．しかし，芝生の気持ちになってもなかなかわからないですよ，横に生えていくということは．そのことだけが不安だったんです．

でも，ちゃんと生えたんです．プロの人が見るとびっくりするんです．いったいどうやってつくったんだと．プロの人も，中にガードレールがあると聞くとほんとにびっくりするんですけど，大成功をしました．最後の問題はこうです．うまくいくかどうか．

（スライド14）

うまくいったんです．ほんとに嬉しかった．ちょっとニラが元気よすぎる感じもしないではないですが，でも，私がいままで見てきた建築と植物の関係の中では一番いいのではないかと思っております．風で揺れるんです．羽虫がたくさん来て，ほんとに聞こえるんですよ，ブーンと．すごくこれはうまくいきました．

以上のようなことをやってきました．赤瀬川さんの家ではうまくいったのですが，一度公共建築でやりたいと思っていまして，でもやっぱり難しいんです，説得するのが．熊本の県の仕事をしました．屋上庭園はいいというんです．僕は屋根のてっぺんに松を植えたかったんです．それは困るというんです．屋上庭園はいいのに，なぜこれが困るかと言っても答えないんです．それで僕はよくわかったんです．シンボル作用と関係しているんです．つまり国旗・国歌問題みたいなのがある．具体的にどうってことないんだけど，僕が，緑を屋上庭園的な形でなくてシンボリックに使うというところで，行政の人はいやがるんです．技術的な問題は全然ないんです．

緑をどう使うかということで，赤瀬川さんちのようなやり方，それから一本松ハウスがそうでしたけれども，量は少なくても，シンボリックにやる，そのやり方が本当のやり方であって，屋根の上に土を入れて，どっと草や木を生やす屋上庭園は基本的に間違っているのではないかと考えております．

以上で話を終わります．どうもありがとうございました．

――了――